



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	社会的コミュニケーションと間主観性：ハーバマスと丸山眞男を軸として〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	高橋, 道子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第11861号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58887
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Michiko_Takahashi_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：高 橋 道 子

学位論文題名

社会的コミュニケーションと間主観性

ーハーバマスと丸山眞男を軸としてー

本論文の目的は、ハーバマスの社会的コミュニケーションに関する理論を、西欧の社会思想史における「間主観性」の観点から分析し、その特質と意義を明らかにすること、続いて、西欧の社会思想分析の方法論を異なる歴史的文化圏に適応する際の問題点を明らかにし、丸山眞男を援用しつつ、日本思想史に見出される「間主観性」との比較を試みること、さらには、以上の思想的・理論的考察の成果から、社会的コミュニケーション一般に関する理論的分析視点の獲得を試みると同時に、現代グローバル社会において望まれる社会的コミュニケーション構築への理論的指針を抽出すること、この三点が中心となっている。

メディアとコミュニケーションの形態が著しく変貌し、また多文化社会の到来とともにその範囲が急激に拡大しつつある現代にあって、山積する課題それぞれに対応する、事例に即したメディア技術的ないしコミュニケーション戦略的研究の重要性は、むしろ、疑い得ない。他方、そのよう状況であればこそ、社会思想史的な視点から抽象的な概念や理論を再度検証する論究の必要性も高まっている。この方向性の試みである本論文は、実践的な要素はやや後退するかもしれないが、現代社会に通底する、不特定多数の主体間における関係性構築という問題を、「コミュニケーションと間主観性」という社会思想的観点から捉え直し、新たな視座を探ろうとするものであり、結果的には、実践にとっても多大な寄与をなしうるものであると考えられる。

次に章立てに従って、本論文の論旨の流れを追うと、以下のようになる。序章では、グローバル化する現代社会における集団的意思決定や市民的公論形成と政策的決定との関係の問題を、社会的コミュニケーションの多様化の観点からスケッチする。続いて、ドイツの社会思想家ハーバマスが、この問題を先取りする形で、近代市民社会ないし公共圏という概念を用いながら長年にわたり主題化してきたこと、またその発想が現代において、例えば、討議民主主義や討論型世論調査という形で具体化され、注目されていることが述べられる。

そのハーバマスの社会的コミュニケーションに関する理論を要約し、確認するのが続く第1章の目的となる。ここでは、西欧における公共圏成立の歴史的経緯や、公論形成の場としての機能、そこで行われるコミュニケーションの規範的な性質（客観的世界と真理性、社会的世界と正当性、主観的世界と誠実性）と行為調整の方法などが明らかにされた後、その理論を支える前提として核となる三つの概念、すなわち自律的主体、間主観性、生活世界が取り出される。

そのなかでも要となる「間主観性」を中心に、思想史的な系譜を追うのが第2章である。クロスリーの研究を参照しながら、西洋における「間主観性」概念の歴史的な経緯を、フッサールにおける自我、メルロ・ポンティにおける身体、意識などとの関連から整理した後に、ハーバマスの「間主観性」概念が、極めて強力な（複数の）「自律的な主体」による「言語的・反省的な相互了解」に基づく「コミュニケーション的間主観性」、ないしは「反省的間主観性」であることを明らかにする。その際、伝統的・文化的「生活世界」は「背景」として後方に置かれ、主体的・合理的コミュニケーションによって更新されつつ「再生産」されるものとして規定されていることも確認される。

第3章では、このような反省的間主観性が、日本社会においても有効な分析装置でありうるか、あるいは日本の思想においてはどのように扱われてきたのかを論じる。導入として、奥田あるいは、部分的に広井のコミュニティ論においても「自律的な主体」という要素の前提が、最終的に日本的共同体の分析に不整合をもたらしていることを指摘する。一方で、日本思想史においては、「無私」「あいだ」「あわい」等の形で「自律的主体」に先行する共同体的間主観性、あるいは非人称的な協働空間が見られることを明らかにし、これを「前反省的間主観性」という名称を与え、ハーバマス（ないし西欧）の「コミュニケーション的あるいは反省的間主観性」と対比的な特性を明らかにする。

「間主観性」という概念こそ使用していないが、この日本的な前反省的な構造を持つ共同体と、西欧的ないしユダヤ・キリスト教的自律的主体による社会の民主化との乖離を、日本近代の問題としてテーマ化した思想家の代表として、丸山眞男を扱うのが第4章である。丸山は、宣長と徂徠に遡行する研究等で、自然と作為、「おのずから」と「みずから」、「である」論理と「する」論理等の構図を摘出し、前者の後者に対する優位性を日本社会の深層に認め、その中にあっても西欧的な政治体制を導入した日本の近代化における矛盾と特殊性を論じていた。これを筆者は、反省的間主観性の深層にある前反省的間主観性構造として捉えなおす。丸山の方法論に倣い、ハーバマスの理論を、日本の社会的なコミュニケーションへと適応する際には、この構造への考慮が必要であることが明らかにされる。

第5章は、日本におけるいくつかの事例に基づきながら、この二つの間主観性による社会的コミュニケーションとそこにおける集団的な意思決定のプロセスに関するイメージを提示する。2012年に実験的に行われた「エネルギー・環境の選択肢に関する討論型世論調査」では、ハーバマスの自律的な主体間における合理的コミュニケーションの性格が浮き彫りにされる一方、神戸の真野地区等における地域社会における合意形成が、自律的な主体によるコミュニケーションの成果と見えな

がらも、実際は強力な前反省的間主観性に支えられたものであることを論じる。すなわち、成功事例と目されるこの事例は、実は、前反省的間主観性への考慮も重要な役割をはたしていたことを明らかにされる。

最終章である第6章では、往々にして近代の社会的コミュニケーションの進化と、前反省的間主観性から反省的間主観性への移行がパラレルに論じられていることへの批判が提示されるとともに、両者の協働する集団的な意思決定や公論形成の意義が理論的に一般化されて論じられる。その際、ハーバマスの理論が再度検証され、道徳的・倫理的コミュニケーションに関する近年の彼の理論的な発言が、二つの間主観性の協働を志向するものへと変化してきていることも指摘される。この変化は、ハーバマスの豹変を意味するものではなく、実は、彼のコミュニケーション理論の「背景」とされていた「生活世界」という概念のなかで、すでに「前反省的間主観性」が潜伏しつつ機能的に重要な役割を果たしていたことが明示化されたものであることが論じられる。この分析は、第4章で確認された丸山眞男の方法論に倣ったものであり、ハーバマス理論の歴史的に規定された深層へと視線を向けたことによって可能になった知見である。また、この解釈の更新によって、ハーバマスの社会理論の分析装置としての有効な領域が拡大され、実践的・機能的な意義が高まったことが確認される。最後に、社会的なコミュニケーションによる意思決定あるいは公共圏における相互了解に関し、新たな形態や可能性を構想する上で、この二つの間主観性の組み合わせに関する配慮が不可欠であることが論じられ、本論は閉じられる。